

# 伝達動詞と照応表現\*

濱寄通世

外国語教育講座

Michiyo HAMASAKI

## 1. 序

Levin (1993, pp.202-212)によって、伝達動詞(Verbs of Communication)と呼ばれている一連の動詞がある。その中でもtalk類の動詞(Talk Verbs)は、よく知られた以下のような対照に関連して、特に議論の対象となることの多い動詞である。<sup>1</sup>

- (1) a. I talked to Thmug about himself.  
b. \*I talked about Thmug to himself.  
(Jackendoff (1972, p. 152))

(1a)では、前置詞toの目的語であるThmugが、再帰代名詞himselfの先行詞となっている。一方容認不可能な(1b)では、前置詞aboutの目的語であるThmugが、再帰代名詞himselfの先行詞となっている。

前置詞の種類によるこのような対照は、従来主題役の観点から説明されることが多かった。例えば有名なJackendoff(1972, p. 148)の説明では、再帰代名詞は以下に示す主題階層において、先行詞より高く位置づけられることはない、とされている。

### (2) 動作主>場所・起点・着点>主題

to前置詞句(以下to PP)は着点(Goal)を表し、about前置詞句(以下about PP)は主題(Theme)を表すとするれば、(1a)では、先行詞Thmugが着点で、再帰代名詞himselfが主題であるので、主題階層条件に合致する。しかし(1b)では、先行詞Thmugが主題で、再帰代名詞himselfが着点であるので、主題階層条件に合致しない。<sup>2</sup>

主題役の観点からの説明に対し、Reinhart and Reuland (1993)やWilliams (1994)は、前置詞の項構造に着目した説明を行っている。Reinhart and Reuland (1993)は、to PPは動詞の補部に生じ、その目的語は動詞の項であるが、about PPは動詞の付加部に生じ、その目的語は前置詞自体の項であるとする。そして二つの前置詞のこうした項構造上の相違から、(1a-b)の対照を導こうとしている。またWilliams (1994)は、aboutが意味的前置詞である一方、toは文

法的前置詞であり、前者が外項を持つものに対して、後者はそれを持たないとしている。

本稿では、about PPとto PPの性質をそれぞれ個別に検討する。2節ではabout PPの生じる統語的な位置について論じ、about PPはto PPと同様、動詞の補部の位置に生じる、ということを指摘する。3節では、前置詞toとaboutを、それぞれ文法のおよび意味的前置詞であるとするWilliams (1994)の分析を検討し、問題点を指摘する。

これら二つの前置詞句を、統語上の位置や項構造の観点から区別することが難しいとすれば、(1a-b)の対照に関して他にどのような説明が考えられるだろうか。4節ではこの点について、久野(1978)、Kuno and Takami (1993)などの説明をとりあげながら、検討する。

## 2. about PPに関する問題

Reinhart and Reuland (1993)は前置詞の項構造に着目して、to PPとabout PPを次のように区別する。つまり前者はそれ自体の項構造を持たず、その目的語は動詞の項である。それに対して後者は付加部に生じ、また独自の項構造を持つので、その目的語は動詞の項ではない(p. 715)。この区別に基づいて、彼らの提案する条件Aにより、(1a-b)の対照を説明している。

### (3) 条件A

再帰的であると標示された述語は、再帰的である。

(Reinhart and Reuland (1993, p. 678))

同箇所を示された「再帰的」および「再帰的であると標示される」の定義を、説明の便宜上簡略化された形で示すと、以下ようになる。

- (4) a. 述語は、その項のうち2つが同一指標を持つとき、再帰的である。  
b. 述語が再帰的であると標示されるのは、その項のうち一つが-selfの形をとる再帰代名詞の場合である。

about PPが動詞の付加部に生じ、その目的語が動詞

の項ではないなら、(1a)においてaboutの目的語である再帰代名詞himselfは、動詞talkを再帰的であると標示しない((4b)を参照)。したがって(3)の条件とは無関係に、(1a)は文法的である。Reinhart and Reuland (1993)は、このように同一述語の項によって束縛されない再帰代名詞を、同一述語の項によって束縛される場合と区別して、発話照応形(logophor)と呼んでいる。一方to PPの目的語が動詞の項であるなら、(1b)において再帰代名詞himselfは、動詞talkを再帰的であると標示することになる。したがって(3)の条件により、動詞は再帰的でなくてはならない。つまり再帰代名詞は動詞の別の項と、同一の指標を持たなくてはならない((4a)を参照)。しかし、文中で唯一可能な先行詞であるThmugは、aboutの目的語であるので動詞の項ではない。したがって再帰代名詞himselfは、動詞talkのどの項とも同一の指標を持たず、(3)の条件に違反することになる。

Reinhart and Reuland (1993)は、about PPが付加部の位置に生ずるとしているが、彼らの(1a-b)の説明において重要なのは、むしろそれが動詞から独立した項構造を持っているということである。実際、about PPが付加部ではなく動詞の補部の位置に生じているという証拠が、従来いくつか観察されている。まず、to PPとabout PPとの語順は、以下に示すように自由である。

- (5) a. I talked to my doctor about the problem.  
b. I talked about the problem to my doctor.  
(Radford (1988, p. 352))

こうした語順の自由さは、Jackendoff (1990, p. 445)やRadford (1988, p. 352)が言うように、これら二つの前置詞句がいずれも動詞の補部となっているためであると考えられる。

また以下のdo soに関する例も、二つの前置詞句がいずれも補部であることを示唆する。

- (6) a. John *talked to Bill about Harry* on Sunday, but he didn't do so on Thursday.  
b. \*John *talked to Bill* about Harry, but he didn't do so about Fred.  
c. \*John *talked about Harry* to Bill, but he didn't do so to Fred.  
(Jackendoff (1977, p. 65), 斜字体は筆者)

(6a-c)に示すように、do soがtalk to ... about ...全体に対応している(6a)のみ文法的である。about PPまたはto PPがdo soに対応する部分から外れている場合には、(6b-c)に示すように非文法的である。do soが動詞とそれを厳密下位範疇化する部分に対応するな

ら、(6a-c)から、to PPとabout PPはいずれも、動詞を厳密下位範疇化する要素であり、動詞の補部に生じることになる(Jackendoff (1977, p. 65))。

Neeleman(1997, pp. 125-126)は、オランダ語および英語を対象として、前置詞句補部の性質を詳しく論じている。その中で、動詞は前置詞句補部の一つのみ選択するとして、そのことに対する理論的な説明を試みている。彼によれば、talk類の動詞は前置詞句補部の一つのみ選択し(to PP)、about PPやオランダ語のover(about) PPは付加部である。それは、理論的な議論の部分を別にすれば、おおむね次のような根拠による。まず、前置詞句が動詞の補部となる場合、一般に動詞と前置詞との間にイディオム的な選択関係がある。したがって動詞は、例えばrely on, look atのように、特定の前置詞を選択する。しかし前置詞aboutの生起は動詞の意味から予測されるので、動詞との間にイディオム的な選択関係があるとは言えない。次に、イディオム的な選択関係がある場合とは異なり、特定の前置詞が動詞によって選択されるのではなく、意味的に動詞と整合性のある前置詞であれば、over(about)に代わって生起することがある。

- (7) Dat Jan over deze kwestie met zijn advocaat  
that John about this matter with his lawyer  
spoken has  
gesproken heeft  
(Neeleman (1997, p. 125))  
(8) a. Dat Jan aangaande deze kwestie met  
that John concerning this matter with  
zijn advocaat gesproken heeft  
his lawyer spoken has  
b. Dat Jan betreffende deze kwestie met  
that John concerning this matter with  
zijn advocaat gesproken heeft  
his lawyer spoken has  
c. Dat Jan inzake deze kwestie met  
that John concerning this matter with  
his lawyer spoken has  
zijn advocaat gesproken heeft  
(Neeleman (1997, pp. 125-126))

(7)におけるover(about)の位置で、(8a-c)ではそれぞれaangaande(concerning), betreffende(concerning), inzake(concerning)が用いられている。英語においても、動詞talkの前置詞句補部の主要部として、aboutの代わりに他の前置詞、例えばconcerningを用いることができる(Dixon (1990, p. 141))。

しかし、put類の動詞を下位範疇化する、場所を表す前置詞句(以下locative PP)のように、動詞との間にイディオム的な選択関係がなくとも、動詞の項と

なっていると考えられる例もある。

- (9) I put the book on/under/near the table.  
(Levin (1993, p. 111))

(9)の例において、動詞putと前置詞句主要部であるon, underおよびnearとの間には、イデオムのな選択関係があるとは言えない。on, under, nearはそれぞれ独自の意味を有するのであって、putとの結合によって初めて特定の意味を持ちうるのではないからである。locative PPのこうした性質にもかかわらず、これを動詞の項として扱うのが妥当であるなら、about PPに関する同様の観察からただちに、これを付加部と決定することは適当ではない、と考えられる。<sup>3</sup>

以上、about PPが動詞の補部の位置に生じ、さらにput類を下位範疇化するlocative PPの場合と同様、前置詞は動詞から独立の項構造を持っているという議論を行った。(1a-b)の対照に関していえば、前置詞aboutが動詞とは独立の項構造を持っている限り、about PPが動詞の付加部ではなく、補部の位置に生じているとしても、条件Aによって同様に説明される。しかし、問題はto PPが本当に動詞から独立の項構造を持たないのか、という点である。(1a-b)の対照に対する説明は、about PPに対してto PPが項構造を持たないということを前提としているからである。次節では、この点に関する問題点をまとめる。

### 3. to PPに関する問題

Williams (1994, p. 220ff.)は、to PPとabout PPが、直観的な意味での、文法的前置詞と意味的前置詞との区別に対応しているとしている。そして文法的前置詞は外項を持たないが、意味的前置詞はそれを持つ、とする。彼によれば、前置詞が外項を持たない場合、(10)に示すように叙述的に用いることが出来ない。

- (10) \*The destruction was of the city.  
(Williams (1994, p. 222))

(10)において、前置詞ofは文法的前置詞であり、外項を持たないと考えられるので、be動詞の後ろに置いて叙述的に用いることが出来ない。ところが前置詞aboutは、以下に示すように叙述的に用いることが可能である。

- (11) The book was about Mary. (ibid.)

彼によれば、もしaboutが外項を持つとするなら、(11)の文法性が説明される。

toに関してWilliams (1994)は、文法的であると同

時に意味的であると論じている。文法的であるというのは、そのように仮定することによって、(1a)と(1b)の対照が説明されるからである。彼によれば、文法的前置詞、つまり外項を持たない前置詞の目的語は、前置詞句の外にある照応表現を束縛するが、意味的前置詞、つまり外項を持つ前置詞の目的語の場合には、それが不可能である。(1a)では先行詞Thmugがtoの目的語であり、toが外項を持たないので、照応表現himselfを束縛するが、(1b)では先行詞Thmugがaboutの目的語であり、aboutが外項を持つので、照応表現himselfを束縛できない。

それに対してtoが意味的であるというのは、それが叙述用法を持つからである。

- (12) The letter was to John.  
(Williams (1994, p. 222))

以上のような理由から、Williams(1994)はtoを「文法的」と「意味的」との間で多義的であると結論付けている。

しかしこの説明には、toを文法的前置詞であるとする根拠が、ほぼ(1a)と(1b)の対照を説明できるということに限られる、という問題がある。また、toが格付与などの文法的機能のみを果たしているという点も疑問である。例えば以下の(13)と(14)の対照について考える。(13a-b)は、動詞talkがto PPとwith PPの両方を取りうることを示している。それに対して(14)は、動詞chitchatがwith PPのみを取り、to PPをとらないことを示している。

- (13) a. Ellen talked to Helen about the problem.  
b. Ellen talked with Helen (about the problem).  
(14) Ellen chitchatted with/\*to Helen (about the problem).  
(Levin (1993, pp. 208-209))

Levin(1993)のこの観察は、動詞の意味的な性質から導かれると考えられる。つまりchitchat類の動詞は、talk類の動詞と比較した場合、伝達の着点よりもむしろ、会話の参加者同士の双方向的な言語活動(spoken interactions between two or more participants (p. 209))そのものを、意味する動詞であるということである。したがって、talk類の場合とは異なり、会話の参加者を示すwith PPをとることはできるが、着点を示すto PPをとることはできない、ということになる。

そうすると、to PPはwith PPに対立する意味を有するという点で、文法的機能のみを持つ前置詞であるとは言い切れないことになる。about PPと同様に、動詞とは独立の項構造を持つ可能性がある。実際、

*locative* PPや*about* PPの場合と同様、前置詞の交替が見られる。つまり、(13a-b)に見るように、*talk*の補部として*to* PPと*with* PPの両方が生じている。

#### 4. 前置詞と発話照応形

以上、*about*と*to*どちらも意味的前置詞であり、したがって両者とも動詞から独立の項構造を持つという可能性を示唆したことになる。Reinhart and Reuland (1993)に従って、項構造を持つ前置詞の目的語となる照応表現が発話照応形であるとするなら、どちらの前置詞句に含まれる再帰代名詞も、発話照応形であるということになる。<sup>4</sup>こうした立場をとった場合、(1a-b)の対照についてどのような説明が可能だろうか。<sup>5</sup>

久野(1978, p. 243)は、再帰代名詞の先行詞が主語ではないとき、その先行詞は「人間」でなくてはならないという、「非構文法的要因」による説明を提案している。以下の例を考える((15)および(16)は久野(1978, pp. 242-243)より引用)。

- (15)a. ?Mary wrote to John about himself.  
b. \*Mary wrote to Harvard about itself/themselves.  
c. This university overextended itself in the sciences in the 1960s.

(15a)では先行詞がJohnという「人間」であるが、(15b)では、先行詞はHarvardであり、「人間」ではない。したがって容認不可能となる。(15c)では、先行詞はThis universityであり、「人間」ではないが、主語の位置に生じているので、許容される。次の例も同様に説明されている。

- (16)a. ?John asked Mary about herself.  
b. ?John interrogated Mary about herself.  
c. \*John discussed Mary with herself.

(16a-c)では、先行詞はいずれの場合にも、動詞の目的語となっているMaryである。久野は、(16c)においてこの目的語は、Maryという「人間」そのものではなく、「Maryのこと」という事柄を指すので、先行詞として不適切であるとする。照応表現に特有のこうした制約が実際に存在するなら、(1b)のような文の「悪さ」は、*about*の目的語が「人間」そのものではなく、Maryに関する「事柄」を表していることから、生じてることになる。<sup>6</sup>この事実をもし何らかの談話上の制約の帰結として説明するなら、おそらく久野(1978)の視点制約から、導かれることになると思われる。<sup>7</sup>つまり、再帰代名詞は話し手がその指示対象寄りの視点を取るときに、用いられる表現である、ということである。話し手は、「事柄」に対してより

も「人間」に対して「感情移入」する方が容易であり、したがって「人間」寄りの視点を取ることの方が自然である、ということになる。もちろん、このままでは非常に直観的な説明であり、どのような定式化がよいのか、については今後の課題となる。

いずれにしても、*about* PPと*to* PPとの項構造上の違いとは無関係に、(1a-b)の対照が説明されることになる。照応表現の中に、統語的な特徴づけを必要とするものと、談話上の制約による特徴づけを必要とするものがあるとするなら、前置詞の目的語となる照応表現のうち一部については、*talk*類の補部の位置に生じる場合を含めて、後者の観点からの検討が必要とされるということになる。<sup>8</sup>

#### 5. まとめ

本稿では、伝達動詞のうち*talk*類の動詞を取り上げ、その二つの前置詞句補部、*to* PPと*about* PPの性質を詳しく検討した。具体的には、どちらの前置詞句も動詞の補部であり、また動詞から独立の項構造を持つという可能性を示した。したがって、(1a-b)の対照を前置詞句の統語的な位置や項構造上の違いから導こうとする試みに対する、一つの問題を提起したことになる。Reinhart and Reuland (1993)の、項構造を持つ前置詞の目的語となる照応表現が、発話照応形であるとの考え方が正しいなら、*to* PPと*about* PPに含まれる再帰代名詞はいずれも、発話照応形であることになる。(1a-b)の対照は、談話上の制約という観点からも検討されるべきである、ということになる。こうした立場をとった場合、(1a-b)の対照をどのように捉えるべきかについて、久野(1978)の視点制約による説明の可能性を示唆した。

#### 注

\*本稿は、参考文献欄に記載した私自身の論文の内容に、新しい議論を加えてまとめ直したものである。

1. 同様の対照は、Postal (1971, p. 193)が指摘している。
2. 主題役階層に基づく説明としては他に、Wilkins (1988), É. Kiss (1991)がある。主題役階層に基づく説明の問題点については、例えばBüring (2005, p. 17)を参照。
3. こうした*about* PPと*locative* PPとの類似に関して、以下のような例を考える。

- (i) a. We talked with Lucy<sub>i</sub> about her<sub>i</sub>.  
b. We talked with Lucie<sub>i</sub> about herself<sub>i</sub>.

(Reinhart and Reuland (1993, p. 715))

(ia)において、Lucieとherは同一指示的である。通常代名詞は同一文中に先行詞を持たないが、(ia)では、(ib)中の照応表現herself同様、それが可能である。ただし、Baltin and Postal (1996, p. 133)によれば、(ia)は容認不可能である。以下の議論は、Reinhart and Reuland (1993)による文法性判断を、前提とするものである。

Hestvik (1991)の観察によれば、前置詞句と動詞との関係には、少なくとも三つの可能性があり、それぞれ次のような性質を持っている。まず付加部前置詞句の場合、その目的語

となる代名詞は、(ii)に示すように同一文中に先行詞を持つが、同じ位置に照応表現が現れた場合、(iii)に示すように容認可能性が落ちる(Hestvik (1991, p. 464)).

- (ii) a. John<sub>i</sub> found a dollar bill in front of him<sub>i</sub>.  
 b. John<sub>i</sub> left Mary behind him<sub>i</sub>.  
 c. John<sub>i</sub> located the treasure right beneath him<sub>i</sub>.  
 (iii) a. ??John<sub>i</sub> found a dollar bill in front of himself<sub>i</sub>.  
 b. ??John<sub>i</sub> left Mary behind himself<sub>i</sub>.  
 c. ??John<sub>i</sub> located the treasure right beneath himself<sub>i</sub>.  
 (Hestvik (1991, p. 464))

次に補部の前置詞句の場合、その目的語となる代名詞と照応表現の両方が、同一文中に先行詞を持つ。

- (iv) a. John<sub>i</sub> put the picture behind him<sub>i</sub>/himself<sub>i</sub>.  
 b. John<sub>i</sub> put the sword down in front of him<sub>i</sub>/himself<sub>i</sub>.  
 c. The children<sub>i</sub> drew circles around them<sub>i</sub>/themselves<sub>i</sub>.  
 (Hestvik (1991, p. 463))

(iva-c)において、前置詞句の目的語となる代名詞と照応表現がいずれも、同一文中の主語と同一指示的である。典型的には、これらはput類の動詞である。これらの動詞は、次に見る(v)のように、動詞と前置詞とがイディオム表現を構成する場合とは異なり、補部の前置詞句は意味的に、一応動詞から独立していると考えられる。したがって、rely on, look atのように、一つの特定の前置詞が動詞と固定的に結合しているのではなく、put NP on /under/near NPのように、場所を表す種々の前置詞が生ずる可能性がある。

最後に補部の前置詞句の場合でも特に、前置詞句の主要部と動詞がイディオム表現を構成する場合、その目的語となる代名詞と照応表現のうち、照応表現のみが同一文中に先行詞を持つ。

- (v) John<sub>i</sub> always relies on \*him<sub>i</sub>/himself<sub>i</sub>.  
 (Hestvik (1991, p. 474))

以上のHestvik (1991)の観察をまとめると、前置詞句と動詞との関係について、少なくとも三つの可能性が存在し、それぞれ以下のような性質を持っていることになる。まず付加部前置詞句の場合、その目的語となる代名詞と照応表現のうち代名詞だけが、同一文中に先行詞を持つ((ii), (iii))。次に補部の前置詞句の場合、その目的語となる代名詞と照応表現の両方が、同一文中に先行詞を持つ((iv))。最後に補部の前置詞句の場合でも特に、前置詞句の主要部と動詞がイディオム表現を構成する場合、その目的語となる代名詞と照応表現のうち、照応表現のみが同一文中に先行詞を持つ((v))。

あくまでReinhart and Reuland (1993)およびHestvik (1991)の観察を正しいとした上での結論であるが、もし(ia-b)に見るように、about PPの目的語となる代名詞と照応表現の両方が、同一文中に先行詞を持ち得るなら、about PPは、上記の二つ目のタイプの前置詞句と最も近い性質を持つことになる。つまり、同じ補部の前置詞句でも、前置詞と動詞がイディオム表現を構成する場合とは異なり、前置詞句に動詞からの独立性が認められる場合である。

about PPの性質については、Büring(2005, pp. 232-234)も参照。

4. こうした結論に対する一つの問題は、Reinhart and Reuland (1993)の次の観察である。彼らによると、about PPに含まれる再帰代名詞は発話照応形であり、(ib)に示すように文中に先行詞を持たない一人称の再帰代名詞が可能である。それに対してもう一方の前置詞句に含まれる再帰代名詞には、(ia)に示すようにこの用法が観察されない。
- (i) a. \*Can you talk with myself about Lucie?  
 b. Can you talk with Lucie about myself?

(Reinhart and Reuland (1993, p. 715))

5. 文構造の観点からのアプローチの必要性については、例えばÉ. Kiss(1991)の次の例文が問題となる。

- (i) a. I talked with the girls about each other.  
 b. \*I talked about each other with the girls.  
 (É. Kiss (1991, p. 252))

この対照は、主題役階層や項構造、また後述の「非構文法的要因」によっては説明できないと思われる。(ia-b)の両方において、先行詞the girlsはwithという同一の前置詞の目的語であり、照応表現each otherは、やはりaboutという同一の前置詞の目的語である。したがって、上記のような観点から、(ia)と(ib)の間で何らかの違いが生じているとは、考えにくいからである。É. Kissは、(ia)では前置詞withが動詞の一部として再分析された結果、the girlsがeach otherをc-commandするが、(ib)では前置詞withは動詞と隣接していないため、再分析は不可能であり、c-command条件に対する違反を生じる、と説明している。

再分析に関しては他にChomsky (1981, pp. 225f.), またLarson(1990, pp. 607-613)におけるtalk類の動詞の分析を、参照。再分析の問題点については、Baltin and Postal (1996)を参照。

6. Kuno and Takami (1993, p. 144)も参照。  
 7. この点について、久野(1978)には明確な記述がない。また、Kuno and Takami (1993)における説明は、彼らの提案する「人間性階層」(Humanness Constraint)において、先行詞は照応表現と同じか、高い位置になくなくてはならないというものである。  
 (i) 人間性階層: 人間 > 人間以外の有生物 > 無生物  
 8. 統語的な特徴づけを必要とする照応表現と、発話照応形との間の線引きの問題に関しては、例えばPollard and Sag (1992)やReinhart and Reuland (1993)を参照。本稿では、暫定的にReinhart and Reuland (1993)の考え方を採っているが、その他の可能性も含めての詳しい議論は、別の機会に譲りたい。

## 参考文献

- Baltin, Mark and Paul Postal (1996) "More on Reanalysis Hypothesis," *Linguistic Inquiry* 27, 127-145.  
 Büring, Daniel (2005) *Binding Theory*, Cambridge University Press, Cambridge.  
 Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.  
 Dixon, R.M.W. (1990) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*, Oxford University Press, New York.  
 濱寄通世 (1997) 「Reinhart and Reuland(1993)における前置詞aboutの目的語となる再帰代名詞の扱いについて」, 『外国語研究』 33号, 67-77, 愛知教育大学外国語教室。  
 濱寄通世(2000) 「aboutを主要部とする前置詞句の性質について」, 『外国語研究』 36号, 37-47, 愛知教育大学外国語教室。  
 濱寄通世(2003) 「二重前置詞句補部構文に関する一考察」, 久田晴則編著『文化のカレイドスコープー 英米言語・文化論集ー』, 283-296, 英宝社, 東京。  
 濱寄通世(2005) 「主題役付与と前置詞句」, 『愛知教育大学研究報告』 第54号 (人文・社会科学篇), 107-113.  
 Hestvik, Arild (1991) "Subjectless Binding Domains," *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 455-497.  
 Jackendoff, Ray (1977) *X' Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.



- Jackendoff, Ray (1990) "On Larson's Treatments of Double Object Constructions," *Linguistic Inquiry* 21, 427-456.
- É. Kiss, Katalin (1991) "The Primacy Condition of Anaphora and Pronominal Variable Binding," in *Long-Distance Anaphora*, Jan Koster and Eric Reuland, eds., pp. 245-262, Cambridge University Press, Cambridge.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』, 大修館書店, 東京.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Larson, Richard (1990) "Double Object Constructions Revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Neeleman, Ad (1997) "PP-Complements," *Natural Language and Linguistic Theory* 15, 89-137.
- Pollard, Carl and Ivan A. Sag (1992) "Anaphors in English and the Scope of Binding Theory," *Linguistic Inquiry* 23, 261-303.
- Postal, Paul (1971) *Cross-Over Phenomena*, Holt, Rinehart and Winson, New York.
- Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar: A First Course*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993) "Reflexivity," *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.
- Wilkins, Wendy (1988) "Thematic Structure and Reflexivization," in *Syntax and Semantics* 21, Academic Press, New York.
- Williams, Edwin (1994) *Thematic Structure in Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.

(平成17年9月16日受理)